

## 故武藤守一先生を偲んで

関 弥 三 郎

九月二十日日曜日の午前十時頃であったか、経済学部長の足立先生よりお電話で、武藤総長が今未明お宅で倒れられ入院された旨のお知らせを受けた時、思わず自分の耳を疑わずにはいられなかった。無理もない。昨夜会議の席で常と少し

も変らないお元氣な先生に接しており、用事があるからとの事で少し早目に退席して行かれる後姿を見送っていたからである。日頃健康を誇りにしておられ、昨年の激しい学園紛争の折には壯者をもしのぐ超人的な活躍をされたあの武藤先生が、今日は再起不能の病床に臥す身になられたとは容易に信じ難いところであった。その後先生のご病状は少しも好転せず、遂に三十日朝逝去されたとの連絡を受けることになった。私は武藤先生のご永眠をお悔みすると共に、立命館において肉身を相次いで失ったような淋しさに強く襲われたのであつ

た。今年の三月私が本学の専任講師になって以来お世話くださった産業社会学部の高橋良三先生が急逝されたばかりのところを、今また学生時代の恩師である武藤先生を失う悲哀を味うことになったからである。

武藤先生は昭和十一年に立命館大学をご卒業後直ちに研究生活にお入りになり、十六年母校の教壇に立たれて以来今まで研究と教育および学内行政に尽力され、特に戦後の立命館の発展に多くの寄与をなしてこられたのであって、いわば立命館の牽引車でありまた生き引き的存在でもあって、名実共に立命館総長の任にふさわしい方であった。武藤先生の学問上の業績、学内行政上の功績については既に「立命館学園広報」(第四号)に紹介されているので、ここでは武藤先生のお人柄についての私の思い出や感想を二、三記して、先生

を偲ぶよすがにしよう。

私が武藤先生を知ったのは昭和十七年四月立命館の高等商業部に入學して先生の貨幣論の講義を受講した時からである。先生の講義はノートを取るのに苦労したことと内容が明快であったことで強く私の印象に残ったのであった。講義は商品の二重性の分析から始めて貨幣の生成を考察して貨幣の本質を明らかにし、価値尺度、流通手段等の貨幣の機能から銀行券の説明に及んだのであるが、非常によく理解できて面白かった。戦後これは資本論第一巻第一編のダイジェストであることを知り戦時中に国禁のマルクス経済学を講義された先生の大胆さに一驚したものであった。講義中に脱線することは殆んどなかったが当時のこととして時々戦争の体験談が出た。日華事変の初期上海の戦斗で腸チフスにかかり野戦病院で一週間余り放置されたが奇蹟的に治ったことや、徐州会戦の折に弾雨の中を地雷の恐怖にさらされながら運を天に任せてしゃにむに南下したことなどの経験から、死なない者はどうしても死なないものだよ、と、淡々とした口調で話しておられることが思い出される。

私が再度武藤先生にお会いしたのは二二年四月であった。

今度は外書講読でありテキストはミルの経済学原理であったこと以外には、その時の状況は全然記憶に残っていない。その頃友人と先生のお宅へ遊びに行った時に、この四月の選挙に応援演説を買って出たことを話され、選挙運動、その他社会人に話しかけ得る機会には積極的に出て行って、国民に資本主義の矛盾を説き社会改革の必要を説明するのだといっておられた。その後武藤先生は日中友交協会を中心に革新諸団体と関係をもって活躍してこられたのであって、従来の研究室中心の大学教授とは違ったタイプの方であった。

私が立命館大学専任講師のポストを与えられたのは二四年四月であった。当時武藤先生は三九才で高橋先生と並んで経済学部の中堅教授であったが、武藤先生は学生部長の要職にお就きになりその上専攻科目の関係もあって、私は殆んど先生の指導を受ける機会はなかった。そして高橋先生が学部内の諸事を担当しておられたので、私達は高橋先生に公私共にお世話になることになった。その後武藤先生は本学教職員組合の執行委員長（二七―二八年度）、経済学部の主事（三一年度）次いで学部長（三三―三四年度）、更に教学部長（三五―三八年度）と心身を休める暇なしに要職を歴任され、立命館大学の今日の発

展の基礎の確立に多大の貢献をなしてこられたのであった。その間にしばしば先生から「難問が次々と起ってきて、これはかなわん、どうにもこうにもならん、という時でも決してくじけない。そんな時には必ず自ら道が開けてくるものだよ。」という意味のことを伺ったものである。これは先生の頑健な身体と大胆な性格、堅いイデオロギー的信念を基礎に、戦場での体験、立命における長年の経験が鍛え上げた武藤先生の人生哲学であると思う。この人生哲学こそが昨年の学園紛争に頑張り通し勝ち抜いてこられた武藤先生の精神的支柱であることを、当時私は一再ならず痛感させられたものであった。

武藤先生はどちらかといえば寡黙であり自分の感情をあまり表面にお出しにならない方であった。時々不満を吐露される時でも表情からはそれは少しも伺えず、人事のようにいわれるのが常であり、私には不思議にさえ思われる場合があった。武藤先生はこのように強い性格の方であったが、それは先生の一面にすぎないことはいうまでもない。先生は三十二年十月から翌年四月まで外地留学に出られ、中国、北朝鮮から亜欧の各国を歴訪してこられたのであるが、その印象をまと

武藤守一先生を偲んで(関)

められた「東風は西風を圧する——欧亜遊学記——」を私も頂いたことがある。それを読むと生命さえ危ぶまれる重病の奥様を残して出発される気掛り以外にも、慣れない外国での一人旅の不安の情が記されており、また帰国の喜びを書かれた箇所にも先生の他の一面を覗きみた感を得たものであった。四三年四月武藤先生は再度経済学部長に選任され、翌年の総長事務取扱を経て四五年二月に立命館総長に就任された。そして全学の先頭に立って立命館大学の改革、発展に挺身されんとする矢先にこの不幸が生じたのであった。今年の夏は委員会のお蔭で先生と時々私にお話する機会があったが、立命館の前途を深く憂慮しておられ総長としての堅い決意を秘めておられるように伺われた。武藤先生は真底から立命館を愛し、求められればどのような難局にも平然として当って行かれた。常に沈着であつて冷静な態度を崩さず、見る人には大変頼もしく感ぜられた。勿論武藤先生に対する色々な批評があることは聞いている。しかし、どんな人でも長所もあれば短所もあり両者の総合評価でみる必要があるであろう。この点からすれば武藤先生は現在の立命館大学にとっては総長として最大の方であつたといえるであろう。この時期にこ

のような方を失うことは立命館大学にとって重大な損失である。否、立命館だけではない。長年武藤先生と一語に国庫助成運動に努力してこられた関西大学の高木秀玄先生は「私大連盟の運動にとっても大きな大きなマイナスである。」と評価しておられた。

以上思いつくまゝに武藤先生の思い出や感想を記してきたのであるが、私の誤解や事実認識の誤りのために先生の眞価を損ねることがないかを恐れるものである。最後に武藤先生のご冥福をお祈りして擱筆する。  
(経済学部教授)

## 清水俊貞

「私は一兵卒として弾丸の下をくぐってき、死ぬような目にあつたこともありますので、こわいと感じるようなことはあまりありません。幸い身体には自信がありますので、これから生れかわつたつもりで一層働らくつもりです。」九月の何日だったか、都ホテルで武藤先生の還暦の祝賀会があつた時、このような趣旨の挨拶をされた。その容貌はまさに若さにあふれ、はつらつとして、私が初めて先生にお目にかつた頃——恐らく四十歳代の初め頃——と見た目には変らないように思えた。その先生が一月たつたかたらずの内に急逝されるとは。

人間というものは親は子の、教師は子弟の、先輩は後輩の

面倒を見、その後輩は恩返しをするかわりに更に自分の後輩の面倒を見ていくということになっているようだ。私も武藤先生にはあらゆる面で御厄介になりっぱなしで、何等のお返しをしないまま逝かれてしまった。かえすがえす残念だ。

昭和二七年私が立命の経済学部に入學した時、武藤先生は経済政策、金融論、外国為替論の三つの講義をもつておられた。今の立命では小クラス授業が多く、これがオーバーワークの一つのたねになっているが、当時の先生方は種類の違う大講義を多く持たされておられたようである。当時の学生間の評判では先生の試験の採点はどちらかというところからい方だった。しかし、講義における真面目な態度は学生の人気を拍

しており、テキストなども最も読みごたえのあるものだった。

大学院に入ってから先生と直接に話もし、またお宅の方へもうかがって御指導をうけるようになった。その頃は中華人民共和国が成立して丁度五年位経った頃で、政治的には「三反」「五反」運動、「百花齊放・百家争鳴」、第二次「整風運動」など色々なスローガンの下に社会主義の建設が行なわれ、経済的には第一次五年計画の下で目を見張るような建設がおし進められていた。武藤先生はかつて軍靴をはいてふんどこられたその地が自らの学問の実証の場と化したのを見すごさず、中国の政治・経済の研究に没頭され、また日中友好運動にも力を入れておられた。日中友好運動にも使節団の一員として彼の地に渡られた時、壁掛をみやげに頂いたこともある。

当時私は国際価値論をテーマとして研究しており、先生にも色々御教示をいただき、私の主張を理解し、支持して下さいました。ただ社会主義圏の内部の貿易にも国際価値論を一定の限界を持たせつつも適用しようと考える私の考えに対しては先生は頑として反対された。その理由としては「社会主義国では全然違うんだ」とおっしゃっただけだったが、この点に

ついては先生ともう少し議論したかった。

修士課程終了後一年程して私は助手に採用されたが、その後もお宅にお宅に時々お邪魔して色々お教えを頂いた。しかしその後先生は教学部長、経済学部長、また粉争中は総長代行などを膺任され、最後に末川総長のあとをうけられて総長になられた。お忙がしいだろうという遠慮もあってここ七八年は全く御無沙汰してしまった。ただ去年の九月、私の父が他界した時は、御多忙中の先生に葬儀委員長をお引受け頂いて、親父の葬式にまで先生の御やかいになってしまった。その先生が丁度一年後に逝ってしまったのである。

武藤先生の思い出はつきない。業協の席で組合の執行委員として先生と対峙したこと、火の気のない寒い教室で大衆団交に臨まれた先生を下から一教員として見まもっていたこと、いつも先生は苦しい中から困難を切り開いてこられたのだ。

先生はあまり遊ぶとか、飲んだり騒いだりすることはされなかった。本当に人生を真面目一本仕事にうち込んで生きぬかれた人である（酒を飲む奴が不真面目だというのではないけれども）。たまに特別教授会の席にでられても、皆がそろそろ御

てはなれない。  
（経済学部教授）

気嫌になり出しても、先生は黄色いジュースのコップを手にして一人ぼつねんと座っておられたその姿が今でも目に残っ

## 山 口 真 三

私が悲報に接したのは九月二十一日の午後であった。

講義を終り研究室へ戻ってくると久保幸雄君から連絡があったという。早速電話すると、「武藤先生がね、——丁度その朝、電車の中で、武藤先生も総長になられ、また還暦を迎えられたことでもあるので、久し振りに昔の大学院の仲間を集めて祝賀の会をやりたいと考えていたことでもあり、やはり彼も——と「脳出血で倒れられ、危篤で今夕が危い」とのこと。余りにも思いがけないことであり、しばしばう然と立った。そこそこに電話をきり、次の講義をして電車に飛び乗った。病院にかけつけると昏睡状態が続いており、意識は全く不明とのことであった。病室の前の廊下で御快復を祈っていると中から時々咳払いが聞えてくる、あの懐しいはりのあるお声が。

あの懐しいお声で、私は学生時代、経済政策論、金融論の

講義を受け、ゼミではマルクスの「経済学批判」を、大学院ではヒルファディングの「金融資本論」を読んで頂いた。

先生の講義は、当時の我々学生の中の評判では、特別にうまいとはいえない。しかし決して下手ではない。なんてなまいきにもいつていたものだ。派手さはなかったが、常にじゅんじゅんと説き来たり説き去られた。そのことは私にとり大いに幸いであった。先生はその経済政策論を、社会の歴史的発展過程から説き起されているが、先生の説かれる史的唯物論と、私の旧来の考え方、主観的なそれとを比較し、その相違と正しさをひとつひとつじっくりと考え合わせる事が出来た。先生の講義のタイミングが丁度一致していたのである。そのためにそれらを自分のものとして自分の頭で理解することができた。また、ふり返ってみると、先生の講義により経済政策に対する興味をかきたてられ、とりわけそれが現代社

会で有する重要性の認識が大学院への進学を決心させ、更に研究生活を続けたいという意欲を起さしめ、私の進路を決定したようである。現在、私は専門分野を異にする会計学の研究に取り組んでいるが、しかし学生時代に先生にかきたられた経済政策に対する興味は、今尚、私を把えてはなさない。今はまだ研究も浅く、会計学の生成過程を学んでいるが、やがては国家独占資本主義の段階の、とりわけ現代における会計に関する国家の政策の研究をしたいと念願している。

あと二、三年ほどすればそれについて先生にお教えを乞いたいと思っていたが、それが出来なくなるとは。

先生のお宅へも何回かお伺いしたが、話題は同窓生達の近況、大学の情勢などを中心に、お忙しいにもかかわらずお相手下さるのが常であった。しかし、それもこころ、二年はきびしい情勢下に大学の要職につかれ、先生のお邪魔をしてはいけないと遠慮して御無沙汰してしまつた。

九月六日の都ホテルでの環曆の集いに幸いにも参加させて頂いたが、尚我々の学生時代と少しもお変りなく、終始にこやかに、あのはりのあるお声で挨拶されていた。しかし、それが先生のお元氣なお姿の見納めとなつてしまつた。

先生は今迄の睡眠不足をとり戻されておられるかのように、こんこんと睡り続けられた。一日何回か診察して下さる安井院長先生の御説明に一喜一憂の毎日であつた。御家族の方々ともどもただただ奇蹟を祈り、先生の御容態から、院長先生のお話のなから少しでもよい兆候を得ようと懸命であつた。しかし御家族の献身的なご看護もかいなく、九月二十九日の朝、遂に永遠の眠りにつかれた。

先生の御恩に何ら報いぬままにおわかれしなければならなかつたことを申し訳なく思い、御霊前にただ今後の努力を誓うばかりである。先生、どうか安らかに眠り下さい。

(大阪商業大学助教)